

---

# 無能な英雄

しろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無能な英雄

### 【Nコード】

N3528BA

### 【作者名】

しろ

### 【あらすじ】

異世界召喚モノです。

主人公は英雄として異世界に召喚されますが、英雄が本来持っているはずの強さを持ちません。突然の異世界、故郷との別れ。周囲の期待や失望。様々な種族が戦争を行う世界で、主人公はどのようにあがいてゆくのか。

## プロローグ

剣戟の響き。馬のいななき。戦士たちの咆哮。 戦場の音。

戦場はまるでおもちゃ箱の様で、おもちゃの兵隊たちはにぎやかに駆け回る。

子どもたちは緊張した面持ちで、しかし楽しげに此方をうかがっているに違いない。

自分のお気に入りの活躍が、気になってしょうがないのだ。

そんな取り留めのない連想に思いを寄せつつ、私は大空を飛んでいた。

ワルキューレの象徴たる翼は力強く空を打つ。

それとは対照的に、私の指先は心もとなく震えていた。空気の冷たさと眼前の戦場を感じて。

「グリフィルド様」

私の横を飛んでいた部下が声をかけてくる。私が彼女の上官だからであろう、

それ以上何も言おうとしないが、眼が「大丈夫ですか？」と問いかけていた。

私が軽くうなずきを返すと彼女は少し安心したのか、わずかばかりの笑みを見せ、

一度大きく羽ばたいた。どうやら、先行してくれるようだ。

わずかに先行している彼女の後姿を見つめる。青と銀を基調とした戦装束、銀色に輝く槍、純白の羽根。静謐さと力強さが共存して見える。神々しいとさえ思えた。

自分も同じ格好をしているはずだが、彼女のような立派に見えるだろうか。私は彼女の様になれただろうか。美しく、気高い、

ワルキューレに。

不意に、爆音が響いた。私は体をたて、空気の抵抗を用いて減速すると、爆音が響いた方向をむいた。眼球に魔力を込めると視力は格段に上がり、

地上の様子がはっきりと見て取れた。異音の原因を探る。いや、原因など分かりきっている。

「いました。『災厄の魔人』です」

爆音の原因は敵、人間たちの英雄だった。今代の英雄は歴代の英雄の中でも最強と目され、戦場で恐れられている存在である。

「妖精たちが「すべてを滅ぼす」と予言した男か・・・」

私のつぶやきに彼女が応じる。

「気まぐれな妖精たちの言うことなんか当てになりません。それより、」

「分かっている。いくぞ。」

私は彼女の言葉を遮ると、腰から下げていた槍を手に取り、地上へ向けて滑空した。

地上では虐殺が行われようとしていた。

勇猛なオークやミノタウロスが襲いかかるも、英雄が手をかざすだけで爆発が起こり、そのたくましい体は炎に吞まれていった。

妖精たちが弓を射かけるも、哀れな戦士たち同様、矢はただただ灰となるばかり。英雄の背中には白銀の大剣が吊り下げられているが、誰も、その剣を抜かせることすらできずにいた。

ふと、英雄のいる場所に影が落ちた。きんつ。

英雄の背後、しかも上空からの一撃を英雄は完璧にいなして見せた。そこから、英雄とワルキューレのブレイド・アーツが始まる

英雄と激しく切り結びながら、私の内心は苦々しさでいっぱいだった。影で悟られるとは、戦場に出たての新米（お嬢さん）じゃあるまいし。。。

奇襲自体は成功といって良い。接近戦に持ち込めたためだ。この距離でなら英雄もその不可思議な術を使うことができない。爆発を起こせば自分も巻き込まれるためだ。

しかし、やはり最初の一撃で終えたかった。そう思わせるほどに、英雄の剣の腕は凄まじかった。ウルキユール二人がかりの猛攻を防ぎきっている。

しかも、時折オークやミノタウロスも斬りかかっているというのに、それでも、だ。

英雄は徐々に防御に回るようになってきている。さつきから攻勢に出られていない。

さしもの英雄も、戦場の猛者たちに接近戦で戦うのには限界がある。特に、ウルキユールはその羽根を活かし、上へ下へと動きまわるのだ。

「自分の身もわきまえない愚か者。貴様など仲間を守られて、後方からこそこそと妖しい術でも唱えていれば良かったものを」

私がそう叫んだ瞬間、なぜか英雄の貌が苦悶に歪んだ。そして、それは機敏に飛び回るウルキユールにとって、大きすぎる隙だった。

倒れた英雄に、いや、英雄だった男のもとへ歩み寄る。普段なら倒した敵になど関心を向けない。

ウルキユールの青い眼は常に次に討つ敵の姿を映していなければならぬから。

しかし、今回はなぜか英雄だった男の顔を見ておかなければならない。そんな気がしたのである。

「さようなら。英雄であった男よ。戦場での死は戦士の誉れ。私がおなたに与えた、栄誉ある死を誇りに思うが良い」

玩具は壊れた。きつと、その持ち主は新たなる玩具を求めるのだらう

## 第1話 求める少女、呼ばれた少年

眠っている間ずっと、優しい歌声と温かな光に包まれていた気がする。

歌声がやみ、冷たい空気が肌を突き刺したところで、穏やかな眠りの時間が過ぎ去ったことを感じた。さあ、起きなければ。

ゆっくりと眼を開けると、ずっと眠っていたためだろう、眩しくて涙がこぼれた。

少年は静かに涙する。本人は自覚していないが、その涙は決して光の刺激によるものばかりではなく、穏やかな時間が過ぎ去り、過酷な日々が始まることを予感したためでもあった。そう、異世界に召喚された英雄はさながら産まれたての赤ん坊のように泣くのだ。

産まれたくなかった、と。

シャツの袖で乱暴に涙を拭きとると、周囲を見渡す。石でできた壁、柱。頼りなげに火が揺れる燭台。僕はテーマパークのようだな、と思った。でもきつと、ここでは現実に人間が暮らしていて、燭台の横に実は電灯のスイッチが隠されているなんてこともないのだろう。そして何より。目の前の怪物たちも仮装ではないのだろう。

いや、怪物と言っては失礼だろう。目の前に立つ5人はあくまで清廉な女性の姿をしているのだから。その体が水色で、彼女たちを通して部屋の扉が透けて見えようとも。

幽霊かなにかだろうか。彼女たちはそれぞれにドレスを着ていて、どこことなく高貴な印象を漂わせている。

「あの、ここは一体・・・？」

そう問いかけると、彼女たちは身を寄せ合って何かを話し始めた。僕の処遇を相談しているのだろうか。その声はぼそぼそとしていて、

聞き取ることができない。

話が終わったのだろう。彼女たちは此方を向き、ふと、そのうちの一人が姿を消した。

それを見て僕は驚くべきだったのかもしれないけれど、何彼女たちはやはり幽霊なんだ、と妙に納得してしまった。

「・・・」

幽霊の一人が僕に話しかけてくる。やはりその声はぼそぼそとしていて、聞き取ることができなかった。さらに、よく見るとその顔もまた、はつきりと見ることができない。のっぺらぼうというわけではない。その顔のあたりは常に陰となっていて、見ることができないのだ。

それでも。声も表情も分からないというのに、幽霊たちが僕のことを気遣ってくれているのが分かった。

「うん、大丈夫。体は・・・少し痛む気がするけど」

幽霊たちがほっとするのが分かる。相変わらず声も表情も分からないというのに。もしかしたら、単なる僕の勘違いだろうか。

こつ、こつ、こつ。

不意に足音が響きわたり、僕の心臓は跳ね上がった。

この建物の気密性が高いためか、足音は反響し、足音の主は1人も5人にも思えた。

慌てて幽霊たちを伺うと、特に驚く様子も焦る様子もない。少し落ち着くことができた。

不思議なことに出会って間もない、会話もできない異形に僕は心を許し始めているらしい。

扉の向こうで足音が止まる。一瞬の静寂。しかしその静けさは錆びた蝶番がきしむ音によって破られた。入ってきたのは、2人。しかし足音の主は1人だったらしい。なぜなら、入ってきたのは1人の少女と先ほど姿を消した幽霊だったからだ。今やっと気付いたが、幽霊は空中をぶかぶかと浮かんでいた。

幽霊が、少女に話しかける。その声はやはりぼそぼそしていて、僕には聞き取ることができなかったが、少女には通じているようだ。「良かった。召喚の儀式は成功だったようですね。霊たちよ、お疲れ様でした。後は私が受け持ちます」

少女がそう告げると、幽霊たちは少女に小さくお辞儀をし、消えていった。

部屋には、少女と僕が残された。幽霊たちがいなくなり、少し不安になる。

「はじめまして。私はノーラ。ノーラ・ブラナー。あなたをここへ呼んだ者です」

よろしくね、と付け加え少女はほほ笑む。その姿は、花がほころんだようで、僕はつい見とれてしまった。身長は低め、小柄でかわいらしい。白いローブを着ているため、体型は分からない。

年ほどのくらいだろうか。高校生ぐらいかな、と僕は思う。大学生まではいかない感じた。

「・・・？大丈夫ですか？言葉は分る？」

そう問いかけられ、ハツと気づく。不安にさせてしまったようだ。

「ご、ごめんなさい。分ります。さっきの人たちの言葉は分りませんでしたけれど。」

「ああ、ゴーストの声が聞きとれるのは魔術師だけです。普通の人にはぼそぼそとした声にしかな聞こえないんですよ」

「魔術師？ノーラさんは魔術師なんですか？魔法が使えるの？」

「うーん、修業はしているけれど、魔術師じゃないわ。結構すごい魔術も使えるんだから。あなたをこの世界に召喚したのも、私の魔術なのよ」

「この世界？この世界って・・・？」

「まって、その前に質問をさせて。あなたはどこから来たの？」

「えーと、日本の「やっぱり！」」

遮られる。少女は頬を上気させ、叫んだ。

「召喚は成功よ！やった、私も呼べたんだわ・・・英雄を！！」

戸惑う僕をしり目に無邪気に喜ぶ少女の姿は、さながら、サンタク  
コースにプレゼントをもらった女の子のようでした。

## 第2話 僕の名前は・・・

この世界では ちなみにこの世界には名前がない。つまりそれは、異世界からやってくる存在は少ないことを意味している。ともかく、名前の無いこの世界には当たり前のように亜人や妖精、怪物なんかの異種族がいて、当たり前のように戦争をしていた。

昔は種族ごとにまとまっていて、それぞれの交流は希薄だったが、大きな争いはなかった。決して争いが少なかったわけではないのだが、争いは種族間で行われ、基本的に他種族とは関らなかった。そのため、争いの末に滅ぶ種族はいても、それはその種族に限った話であったし、自然界の掟と許容することができたのである。

しかし、魔王の誕生によって状況は変わる。魔王の出自は誰も知らない。種族も謎とされている。人間のような要望をしているが、その桁外れの巨体と力は巨人族の血をひいているようにも思えるし、その膨大な魔力はさながらエルフか妖精のようであった。

ともかく、魔王はたった独りで様々な種族を屈服させていった。巨人のごとき腕力は逆らうものを微塵に砕き、エルフのような膨大な魔力から紡がれる魔術は逃げまどう人を消し飛ばした。わずか数年で、魔王は多種族を従え、力によって統制された恐怖の王国をつくりだした。それに危機を感じた者たちは、種族の壁を越えて団結した。決して小さくはない思想や習慣などの壁は魔王の恐怖によって崩されたのである。

それから数百年、魔王と同盟国の争いは続いている。やはり人間ではないのか、魔王は数百年たっても健在である。髪や髭が白くなり、多くのものは魔王の寿命に期待したが、そんな淡い期待は、戦場で魔王の活躍によって霧散することとなった。

魔王軍は精強であった。魔王の実力もさることながら、魔王の精鋭と呼ばれるワルキューレの活躍も大きかった。同盟国がこのような強大な敵に対抗できたのは、英雄の存在によるところが大きい。英雄は人間の王族によって異世界から召喚された人間である。英雄は必ず神秘的な能力を持ち、その力で魔王と闘ってきた。そして、英雄が命を失うたびに、王族は新たな英雄を召喚したのである。

だからお主には、同盟国を率いて魔王と闘ってもらいたい。

謁見の間にて、目の前の小柄なおじいさん 国王から言われたことはだいたいそんな内容だった。

でも僕はまだ14歳の子どもで、喧嘩すら碌にしたことがなくて、人の命を預かって闘うなんてことできるはずがなかった。戦争なんて自分から縁遠いものとしか認識していなかったし、自分が誰かを傷つけられるとは思えなかった。

僕は同世代の男の子と比べてだいぶ華奢な、女の子のようだとよくからかわれた自分の肩を抱いて、震えた。

「ふむ、怖いのか。震えているな・・・まるで女子のようだの？ノ  
ーラよ。本当にこ奴は闘えるのか？」

震える僕を見て、王様はノーラさんに問いかける。

「ええ、心配ありませんわ。お父様。彼が英雄であることは間違いないことです。力に目覚めれば、彼も遅しくなってくれるでしょう」

「・・・そうだな。こう見えて英雄。常識にとらわれてはいかんな。それでは、明日には早速最初の試練を「待ってください」「反射的に叫ぶ。」

「僕は、僕は闘えませんが・・・！」

「心配するでない。どれだけ勇敢な英雄であっても、召喚されたばかりでは闘うすべを知らぬという。よほど日本、という世界は平和なのだろう。お主も自分に眠る力を自覚すれば、そこらの奴には傷

「一つ付けられぬようになる」

「そうですね。英雄にはそれぞれ固有の神秘的な力が宿っているそうです。例えば、前代の英雄は手をかざすだけで大きな爆発を起こし、敵の軍隊を幾度も葬ったそうです」

「あなたにどんな力が宿っているのか、楽しみです。そう言っただけなら僕は僕に微笑みかける。」

「でも、すごい力があっても、僕は人を殺すなんて……」

「敵には人間はおらぬ。お主が殺すのは強欲な魔の男とそれに従う邪悪な怪物どもよ」

「それでもっ。僕には……!」

「……ノーラ」

僕の言葉に機嫌を損ねたのだろう。王様の言葉には不機嫌さがにじみ出ていた。そのためだろう、ノーラさんは慌てる。

「待ってくださいお父様。彼も召喚されたばかりで戸惑っているのでしょう。この話はまた日を改めて……」

「分った。そうしよう。英雄殿、次は色よい返事をお聞かせいただきたくはなすな」

「……王様との初めての接見はこうして気まずい空気と共に終了した。」

「お父様がごめんなさいね。」

謁見の間を辞し、お城。僕が召喚されたのはお城の地下室だったの廊下を歩きつつノーラさんは僕に謝る。

「いいえ、僕があまりにふがないので怒ったんだと思います。僕がもっとしっかりしていれば……ノーラさんにも」

平静になり、すっかりノーラさんの顔をつぶしてしまったことに僕は気づいていた。

「召喚されたばかりなもの、仕方ないわ。でも、本当に敵を討つことを気にする必要はないのよ。実りある豊かな大地を侵し、清廉な森を焼き払う、恐ろしい魔王とその手勢なんですから。敵を討てば

お父様も国民も喜ぶわ。あなたはみなから英雄と称えられるのよ」「でも……」

そう答える僕にノーラさんは困ったような顔をする。

「まあ、今日は疲れたでしょうからもうお休みなさい。難しいことは明日考えれば良いわ」

いつの間にか目的地に着いていたらしい。ノーラさんは豪華な意匠の扉の前で立ち止まった。

「ここが今日からあなたの部屋よ」

部屋の中は扉に負けず劣らず豪華だった。ベッドも天蓋というのだろうか、カーテンのようなものがついていて立派だった。こんなに大きなベッドなら寝相が悪くても落っこちたりしないだろうな、と思う。

「じゃあ、また明日。ゆっくりとお休みなさい」

部屋の中で少しお喋りをして、ノーラさんは部屋を出ていこうとする。

「ノーラさんっ」

とつさに、ノーラさんの服の裾を掴んでしまった。

「あ……ごめんなさい」

あわてて手を離すとノーラさんはふっと微笑んで僕の頭を優しくなでてくれた。

「いいのよ。知らない土地で不安なのね。大丈夫。あなたならすぐに慣れるわ」

ノーラさんは優しい。なでられていると安心する。それに、良い匂い。ノーラさんの匂いをかいてしていると幸せな気分になって頭がぼつつとしてしまう。

「お休みなさい……ああ、それと」

ノーラさんは扉をあけると、振り返ってこう言った。

「私はこの国の王の次女。ノーラ様って呼ばないと駄目よ」

ああ、やっぱりか。お姫様なんだし様付けしないと駄目かな？とは

思ったのだが、慣れない呼称を使うのに抵抗がありノーラさんと呼んでしまっていた。失礼だったよね。

「ごめんなさい、ノーラ様。それと、」

うん、と首をかしげるノーラ様。

「僕の名前は圭。圭 有馬です。これから、よろしくお願いします」  
そう言って頭を下げる。

「ケイ、ケイですか・・・ふふ、可愛い名前ね。よろしくね、ケイ」

こうして、僕とノーラ様の出会いの日は終わりを告げたのでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3528ba/>

---

無能な英雄

2012年1月9日20時46分発行